

Challenge

3

何もない時代に育った。だからこそ、ものは大事にしたい。昔を思い出しながら、炭を焼くのもいいものですよ。

おだ・とよし
小田 豊司さん
(79歳・吉和)

「趣味でやっています」と、吉和で炭を焼いている小田豊司さん。農業指導員だった父の代から炭焼きを行っており、その背中をみて覚えたとのこと。本来は山の中にある炭焼き窯だが、「目の届くところに」と、自宅近くに作ったそうだ。

吉和生まれで、地元の高校を卒業後、吉和郵便局に勤務。転勤も含め38年間勤めた後、田んぼや畑仕事の傍ら炭を焼き、奥さんの次恵さんと一緒に老後の生活を楽しんでる。頼まれれば販売することもあるそうだが、もっぱら自宅で使うためだとか。吉和で育つナラの木をよく使うといい、「原木を切りに行くこともありますが、苦勞はありません。好きでなければ続きませんよ」と笑って話す。「今でも、七厘やこたつなどに重宝しています」。

木を窯に入れ、火を付け、全体に火が回ったら密閉する。「煙突からの煙の具合で、良い炭になるかどうか分かるんです」。



昔ながらの生活を
楽しむ生き方！

戦争を経験した激動の時代に生きた小田さん。「あのころの生活はとても苦しかったです。煮炊きや暖を取るのに特に炭は貴重で、生活には欠かせないものでした」と当時を振り返る。「何もない時代に育ったからこそ、物のありがたさを実感しています。使えるものはいっつもでも大事にしたいんです」。

人生は、いつだって挑戦だ！

Old Rookie
オールド・ルーキー

Challenge

4

夫婦で二人三脚、あせらない生き方！

かまだ・てるみつ
蒲田 輝光さん (66歳)
としこ
敏子さん (59歳)
(宮島町)



あせらず、ゆっくりと、生まれ育った地域の良さを
実感して生きていく！

退職を期に、生まれ育った宮島で民宿を始めた蒲田さん夫妻。輝光さんは、高校入学時から地元を離れ、日本各地の転勤

で40年以上経ち、宮島に帰郷した。もともとは、輝光さんの単身赴任時に、敏子さんが飲食店を経営。知り合いを泊め、宮島を案内するなどしていたが、「もっと気兼ねなく泊つてもらえたら」と、自宅を改装し、昨年5月に「民宿かまだ」をオープンした。「生まれ育ったこの場所を愛しています。会社勤めの間は帰れなくても、いつかはここに根づきたいと思っていました」と輝光さん。自慢は、隣接した昔ながらの造船所とそこから続く海。部屋の窓やお風呂からも海を眺められ、潮の香りとともに非日常的な空間を提供する。また、庭先にある船からは季節を通して釣りを楽しむ。

船大工のお父さんが造ったという木造船がそこにあり、また、民宿の廊下にも船の一部がオブジェとして飾られている。「お客さんから『宮島に来ると元気がもらえる』とよく言われますが、逆にわたしたちがその言葉で元気をもらっています」と敏子さん。

家族のようなお付き合いと、夫婦二人でできる範囲のおもてなしをモットーに、宿泊は1グループに限定。「気持ちよく宮島を堪能していただくには今の

う語る豊司さんは、「何でも捨てない」断捨離の逆をいく。さまざまな物が詰まった宝箱のような倉庫は、昨年行われた「吉和おさんぽギャラリー」に出展し、多くの人を楽しませた。「あの苦しかった時代があったからこそ、歯を食いしばって今まで生きることができたんで

す」と言い切る豊司さん。「今の生活はとても便利になり、吉和でも新鮮な魚がいつでも食べられるようになりました。しかし、苦しかった昔を思い出しながら、のんびり炭を焼くのもいいですよ」と笑って話してくれた。

Challenge

5

楽しみながら、地域づくりに携わるといいう生き方！

退職して初めて見えた地域のこと。やっぱ、普段からのつながりが大事。ふれあいを大切にした地域づくりができたらいですね。



かわぐち・けいこ
川口 慧悟さん
(68歳・下の浜)

川口慧悟さんは退職後、生まれ育った大野6区で、区長としてまちづくりに携わっている。高校の音楽教諭として、37年間教鞭をふるって来た。佐伯高校を最後に退職。その後民生委員として5年間活動し、平成23年から区長として尽力している。「わたしみたいな者がさせていただくのは、本当におこがましいのですが」と川口さん。仕事に忙殺されていたため、それまで地域のことは何も知らなかったという川口さん。それが、民生委員の経験で地域のことが少しずつ見えてきたとき、強く推薦され、『今からでも何か地域のために』と決意した。「女性会や万年青会をはじめ各種団体がしっかりされているので、いつも支えてもらっている

ます。わたしの出る幕はありませんよ」と笑って話す。「それでもやはり、引き受けるときはかなり覚悟が必要でした。だから、今後区長を引き受けやすい体制を作ることが必要だと思っただけです。それまでは、一度引き受けると任期の見えなかった区長。そこに、最大4年という決まりを作った。「任期のゴールが見えるからこそ、目的を持って何かに取り組むことができると思うんです」。

組織を作って行きたいです。「何かを犠牲にして役員をするのは誰にとってもつらいことわたしは生活もしっかり楽しんでいきます。肩肘を張らないのも、川口さんの生き方だ。「防災訓練」として行うのではなく、運動会などで、それとなく防災に関するイベントを盛り込んだり、「炊き出し訓練」を兼ねていたり、そこには6区独自の手法が盛り込まれている。「区制というのは大野地域固有のものです。長い間地域に根付いた組織。同じ区に住んでいるというだけで、親戚のような感覚になります。いざというときに生きるのには、普段からのつながり。ふれあいを大切にした地域づくりができたらいな」と思っています」。